
ホットニュース(平成14年度／第54号)

●今月の業界ホットニュース／下町再生特区

先日、下町向島一帯のまち歩きに参加した。鉄道駅から離れているのにもかかわらず京島橋商店街は賑わっており、近くには伝統職人芸として墨田区の指定するマイスターの、藍染めや羽子板などのミニ・ミュージアムがあり、マイスターの説明も過剰なくらい丁寧で、下町らしく親しみつつ歩ける地区である。締め親会が向島百花園だったこともあり、ミニ都市観光といった趣であった。

この一帯は木造密集地区であり、墨田区では、細かに種地を確保しながら、車回しができる程度の道路とコミュニティ住宅などの整備を地道に進めているが、整備に当たっては下町の既存コミュニティの維持に腐心しているようである。細い路地で構成されている下町再生にとっては、建替もできない建築基準法の前面道路の規定が癌となっていると、担当者は嘆いていた。

折しも、夫婦善哉で有名な法善寺横町の火災のニュースが流れていた。ここも巾員2mほどであるが、繁華な路地空間である。しかし再建を妨げる基準法の規定に、被災者は困惑しているようだ。2、3人がすれ違うのにも肩が触れ合い、軽く会釈を交わすところに人情が生まれる所と街の人はいつていた。

防災対策が重要なことはいまでもないが、建物側の防災技術は高度化していることもあり、路地空間を活かした下町再生特区を都市再生特区の一つとしたらどうであろうか。

(代表取締役 堀田 紘之)

●バリア“階段”も結構悪くないかも！

平行移動に加えて、階段の上り下りなど縦方向の動きも把握できる「3次元歩数計」を、東北大知能制御システムのグループが開発したというニュースがあった。昇降を含めた運動量が正確に測定でき、エネルギー消費量が計測可能なことから、糖尿病患者や高齢者の健康管理などにも役立つと期待されているとのことである。階段の上りと平地の歩行では、同じ1歩でも消費エネルギーは5～10倍違う。ところが、従来の歩数計では区別が困難だったという。そこで研究グループは、気圧計のデータ処理の仕組みを工夫。階段1段分にあたる2、30センチの違いを識別できるよう改良し、精度を高めた。これに、上下の振動などを記録する加速度計を組み合わせることで、階段の上り下りした場合とエレベーターを利用した場合を区別するなど、実際の運動量を正確に把握できるようにしたという。

都市に目を向けてみると、人工地盤・地下利用などによるまちの立体利用が当たり前のようになり、個人の移動エネルギーも増加する一方で、近年ではバリアフリー化の取り組みにより、エレベーター、エスカレーターが数多く設置されるようになった。エレベーター・エスカレーターは確かに便利で、高齢者や移動に困難が伴う人達などには必要不可欠なものとなっている。しかし、このような機械によって今後個人が運動／消費エネルギーといった“健康”という側面から考えた場合、最近特に悪者(?)にされているバリア“階段”も結構悪くないかもしれないと考えてしまった。

また、最近、通学途中の元気な学生がエレベーターを占拠し、高齢者が乗れないで困っているという光景を見ることがある。これでは本来のバリアフリーにはなっていない。

“健康で文化的な都市生活”を実現するためには、街の階段のあり方について考え直してみることも重要かもしれない。

(交通計画部 坂本 裕之)

●業界内の若手の連携について

都市計画コンサルタント業界の30歳前後の若手は、これまでの作業中心の業務から、自分でプロジェクトを動かしていく業務へ転換する年代にある。そのような業界の若手が集まり、情報交換、業務に関わる相互のアドバイス、計画論に関する議論を行う場として、若手の勉強会:UC(UrbanCommon)を開催している。UCは、我が社を含めた6社程度の若手社員をメンバーとして、月1回程度開催している。

UCの概要は、持ち回りで、ホストとなる会社がテーマを設定、簡単な資料作成を行い、メンバー全員でテーマに沿った議論を行うものであり、毎回10人程度のメンバーが集まっている。会の後には2次会が開催され、議論の続きや業務に関する愚痴等を酒を飲みながら語り合う場になっている。その他、インターネットを活用した掲示板により、日常的に情報交換を行っている。前回は9月5日に「住民参加と計画作成」とい

うテーマで開催し、各人が携わってきた住民参加に関連したプロジェクトについての情報交換と、各人の持つ住民参加論を展開させ活発な議論が行われた。

今後もお互いが助け合い、かつ刺激しあいながら、各メンバーが業界を背負う年代になるまで続けていきたいと考える。
(都市計画部 内山 征)

●青年海外協力隊レポートvol.15～モロッコ人の夏の過ごし方

今年の夏は、日本は記録的な暑さだったと聞いているが、かたやモロッコでは例年ほど暑くもならず、暑い日も長続きしなかった感がある。それでも、内陸の盆地にあるフェズでは45℃を超える日もあったとか。いわんや砂漠地方をや…などと想像してみるものの、高原地帯に位置する私の街では30℃台後半がせいぜいで、乾燥した気候と涼しい風のおかげで比較的過ごしやすい夏を送ることができた。

さて、我が街は避暑地である。この夏も、モロッコ各地から大勢の避暑客が訪れた。モロッコでは、7月、8月とその前後がバカンスシーズンである。皆、大体2週間くらいの休暇を取って、バカンスに出掛ける。職場での休暇を取る権利は子供を持つ世帯主が優先で、新婚、独身などは後回しにされる。バカンスを過ごす場所は、内陸に住む人なら海沿いの街、海沿いに住む人なら高原の避暑地、というパターンが多い。そこに勤務先の保養所があればそこに滞在し、なければアパートの1室を借りたり、家ごと借りたりする。そして滞在中は、散歩やプールでの水泳、近郊の観光地へのドライブなどをして過ごす。

この観光地への移動、車を持っている人は車で移動するが、電車を利用したり、長距離バスを利用したりする場合も多い。また、家族の多いモロッコ人のこと、夫婦+子供だけではなく、両親、兄弟姉妹、従兄弟・従姉妹、ときには家で雇っているお手伝いさんまで連れた、大人数での移動となる。車にも7、8人が鮎詰め状態である。

一方、我が街には25の保養所がある。民間企業のものもあるが、大体は官公庁のものである。広い敷地にいくつもの宿泊棟と管理棟があり、プールや運動場を備えているところもある。部屋は、広いサロンと寝室、台所がついており、食事は自分たちで用意するようになっている。しかし、普段は人口1万5千人の小さな街に、夏の間は4倍くらいの人々が居住し、夜などは中心街で人と車の大混雑が起こる。また、中心街のメンテナンス不足を指摘する避暑客も多い。この夏の人口に対応した街づくりがこの街の課題の一つでもある。

(都市計画部 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成14年9月15日発行)

////////////////////////////////////